

---

# Dolcest ~ Edenの物語 ~

ひいらぎ真白

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Dolcest Edenの物語

### 【Nコード】

N4161J

### 【作者名】

ひいらぎ真白

### 【あらすじ】

神崎陽、高校3年生。彼はある日突然異世界に呼ばれた。人間以外の生き物の暮らすその世界。知らず知らずのうちに陽は壮絶な試練ゲームに巻き込まれていく。

”死にたくなければ……殺せ”

逃れられない運命、終わらない現実。そしていくつもの願い。全てが終わる時、頂点に立つのは……。

## 第一章　屋敷

### 第一章

屋敷

俺は今、森の中に居た。昏間のはずなのにあたりは暗い緑で埋め尽くされ上空に星が瞬き、夜なのかと思えばところどころに暖かな光が差しているのが見える。そして目の前の開けた空間には、一つの屋敷が建っていた。これほど立派なものだというのに、重々しい外観のせいかな森の温かみとかけ離れて無機質な存在に思える。何故自分がこんなところにいるのかわからない。つい数分前まで、俺はバスケの関東大会の場にいたはずなのに……。

「陽ー！！ダंकを見せてやれっ！！」

ダン、ダンとボールの弾む音が響く中、俺は戦場に居た。ボールは自分の手中にあり、ドリブルで敵を抜いてきたためゴールを目の前にしてノーマークだ。周りの声に促されるままに俺は宙へと体を投げ出し、小さな丸いゴールへと手をかけ中へボールを投げ込んだ。

「試合終了。」

笛の合図と共にゲームの終了を告げる審判の声がかかる。湧き上がる歓声を耳にリングにぶら下がったままだった陽が、地面へと着地した。途端に陽は押し寄せてきたチームメイトやらギャラリーやらの波に飲まれ、背中や肩を叩かれ、頭をなでられの大騒ぎの渦中に放り込まれた。

「やっぱ陽はすげーよ！これで全国大会出場決定だぜ。」

「良いとこばっかもってきやがってコノヤロー。」

チームメイトの言葉に思わず笑みが零れる。

「バーカ、運だよ運。第一拓也のパスで抜けてこれたんだし、アイツのおかげ。」

陽はニツと笑みを浮かべてそう返すと身を締めこつそりと歓喜に沸く渦の中から抜け出して、体育館の裏へと足を運んだ。タオルで汗を拭いながら外へ出ると、そこには一番の親友である拓也の姿。黒い髪と細身な体型、男の俺が言うのも変だがかなり綺麗な顔立ちだと思う。女子にはもちろん人気が高い。陽を見ると拓也は優しく目を細め、陽の方へと歩み寄ってきた。

「やったな陽。やっぱお前が一番だ。」

陽に気づいた拓也が珍しく嬉しそうに顔を綻ばせる。何気なく片手を出してきた拓也の手に陽がハイタッチをしてにやりと笑った。

「何言ってるんだよ、お前と俺で一番だろ。」

「だといいんだけどさ。…さーと、陽はここでしばらく休めよ。疲れとれたら一緒に来て騒ごうぜ?」

拓也はははつと小さく笑うと陽の肩を軽く叩き、いまだに騒いでいるチームメイトの元へ戻っていく。

ようやく一人の時間ができた。改めてスコアボードの点数を見ると、

結果は62対58。本当に危なかった。普段ならばこうはてこずらないだろう。それほどこのチームはうまいのだ。ここまでの苦戦を強いられたのは相手の汚いやり方のせいである。

ごろんと芝生の広がる場所へ横になると天を仰ぐ。僅かに痛みが残る肩に手をやって溜息を一つ紡ぐ。見事に審判の目を盗んで繰り返された違反行為に仲間の体はポロポロだ。俺も例外ではないけど…

…。

疲れた。今の状況はその一言で片付くだろう。茶色い髪が目にかかるのを静かにどけてから、ゆっくりと目を閉じた。少し休んだらみんなのところへ行こう。そしてまたみんなでラーメン屋でお祝いして、バタバタ騒いで……。

そう、このときはまだ思っても見なかった。

次に目を開けた時に異世界に飛んでいるなどと言うことは、これっぽちも考えなかった。

## 第一章

〈屋敷〉

俺は今、森の中に居た。昼間のはずなのにあたりは暗い緑で埋め尽くされ上空に星が瞬き、夜なのかと思えばところどころに暖かな光が差しているのが見える。そして目の前の開けた空間には、一つの屋敷が建っていた。これほど立派なものだというのに、重々しい外観のせいか森の温かみとかけ離れて無機質な存在に思える。

何故自分がこんなところにいるのかわからない。

つい数分前まで、俺はバスケの関東大会の場にいたはずなのに……。

「陽ー！！ Dank 見せてやれっ！！」

ダン、ダンとボールの弾む音が響く中、俺は戦場に居た。ボールは自分の手中にあり、ドリブルで敵を抜いてきたためゴールを目の前にしてノーマークだ。周りの声に促されるままに俺は宙へと体を投げ出し、小さな丸いゴールへと手をかけ中へボールを投げ込んだ。

「試合終了。」

笛の合図と共にゲームの終了を告げる審判の声がかかる。湧き上がる歓声を耳にリングにぶら下がったままだった陽が、地面へと着地した。途端に陽は押し寄せてきたチームメイトやらギャラリーやらの波に飲まれ、背中や肩を叩かれ、頭をなでられの大騒ぎの渦中に放り込まれた。

「やっぱり陽はすげーよ！これで全国大会出場決定だぜ。」

「良いとこばっかもってきやがってコノヤロー。」

チームメイトの言葉に思わず笑みが零れる。

「バーカ、運だよ運。第一拓也のパスで抜けてこれたんだし、アイツのおかげ。」

陽はニツと笑みを浮かべてそう返すと身を縮めこっそりと歓喜に沸く渦の中から抜け出して、体育館の裏へと足を運んだ。タオルで汗を拭いながら外へ出ると、そこには一番の親友である拓也の姿。黒い髪と細身な体型、男の俺が言うのも変だがかなり綺麗な顔立ちだと思う。女子にはもちろん人気が高い。陽を見ると拓也は優しく目

を細め、陽の方へと歩み寄ってきた。

「やったな陽。やっぱお前が一番だ。」

陽に気づいた拓也が珍しく嬉しそうに顔を綻ばせる。何気なく片手を出してきた拓也の手に陽がハイタッチをしてにやりと笑った。

「何言ってるんだよ、お前と俺で一番だろ。」

「だいたいんだけどさ。…さーと、陽はここでしばらく休めよ。疲れとれたら一緒に来て騒ごうぜ?」

拓也はははつと小さく笑うと陽の肩を軽く叩き、いまだに騒いでいるチームメイトの元へ戻っていく。

ようやく一人の時間ができた。改めてスコアボードの点数を見ると結果は62対58。本当に危なかった。普段ならばこっちはてこずらないだろう。それほどこのチームはうまいのだ。ここまでの苦戦を強いられたのは相手の汚いやり方のせいである。

ごろんと芝生の広がる場所へ横になると天を仰ぐ。僅かに痛みの残る肩に手をやって溜息を一つ紡ぐ。見事に審判の目を盗んで繰り返された違反行為に仲間の体はボロボロだ。俺も例外ではないけど…

…。  
疲れた。今の状況はその一言で片付くだろう。茶色い髪が目にかか  
るのを静かにどけてから、ゆっくりと目を閉じた。少し休んだらみ  
んなのところへ行こう。そしてまたみんなでラーメン屋でお祝いし  
て、バタバタ騒いで……。

そう、このときはまだ思っても見なかった。

次に目を開けた時に異世界に飛んでいるなどと言うことは、これっぽちも考えなかった。

そう、体育館で目を閉じて……気がついたらもうここにいた。

駄目だ、何度思い返してもこんなところに来た記憶はない。俯いていた頭を緩く振って、もう一度目の前の光景に目を向けた。何度も目を閉じたり開いたり、おまけに頬まで抓ってみた。しかし依然として堂々とした屋敷は消える気配を見せず、森の緑も一層映えるのみだった。

「……もしかしたら案外近い場所なのかも。」

一つの捨て切れなかった希望を胸に、屋敷をひたと見据える。そして不安の滲むぎこちない動作で屋敷の方へと歩き始めた。すぐ近くに見えたのだが、意外と距離がある。ようやく屋敷の目の前にたどり着くと、その存在感のある大きさに圧巻された。まるで漫画やアニメに出てくるようなお屋敷。だがこれは現実である。

そうだ、こんな立派な屋敷なんだからもしかしたら大富豪とかが住んでるかも。そしたら俺を元居た場所へ返してくれるかもしれない。覚悟を決めると俺は期待と不安を胸に、少し震える手でドアをノックした。

……が、その手は空中で空振りすることとなった。なんとノックをする前に扉が開いてしまったのだ！

陽が驚いて目をぱちぱちさせていると、中から姿を現したのは少女だった。小柄で金色の髪に鋭く光る赤い瞳。黒と白のドレスを身に

纏う姿はまるでフランス人形だ。俺は何ともいえぬ少女の雰囲気に陽は金縛りにあつたかのように動けなくなった。

「入りなさい、丁度来る頃だと思っていたわ。」

「え?... あ、はあ.....。」

少女は冷たく言葉を投げかけた後、俺に背を向けて屋敷の中へと消えていく。俺はというと予想もしなかった言葉に面食らってしまった。まぬけな返事をしてから慌てて少女の後を追った。目的も持たずに此処へきたのに”来る頃だと思った”? どう考えてもおかしい。しかしなんにせよ人がいただけでも助かった。これで家に帰れるかもしれない。中に入ると広い空間に、高い天井が広がっていた。これは知っている、確かエントランスといって日本でいう玄関のようなものだ。少女はエントランスから続く階段を登り始めた。後ろを振り返ることも話し掛けることもせず、ただ黙々と歩いている。こうなってしまうのは俺も黙ってついて行かざるをえなかったが、初めてみる豪華な屋敷内に、きよろきよろとせわしなく視線を泳がすのだけはやめられなかった。2階の廊下の一番奥、突き当りの部屋の前まで来ると少女は立ち止まり、ドアを開いた。一度俺のほうを向いたかと思うとそっけない視線を向けて、またもや先に中へと入ってしまう。後に続いて中に入ると今度は普通のホテルの部屋のようなだった。ソファとベッド、クローゼットが一個ずつ、そこに机と二つの椅子が置いてある。

「適当に座って頂戴。」

少女はソファに腰掛けて、早く座れと言わんばかりに視線を向けてくる。相手の方が年下に見えるというのにどうもそんな気がしないのは何故だろう。そんなことを考えながらとりあえずはソファに近

いベッドに腰を落ち着けた。

座ってからしばらくは、沈黙が続いた。窓の外で揺れる木の葉の静かなざわめきと、時計の刻む音以外は何の物音もしない。時が過ぎるに連れて緊張は高まり、更には射抜くような少女の視線が指一本動かすことも許さなかった。

「その様子だとやはり何も知らないのね、……大抵みんなそう。自己紹介がまだだったわ、私はエルザ。貴方は？」

沈黙を破ったのはやはり少女の方だった。俺はようやく肩の力を抜き、静かに息を吐いた。それもつかの間、エルザと名乗った少女が溜め息混じりに呟き、少し細くなった目で俺を捉える。再び俺の表情は緊張した面持ちへと戻り、問いかけに答えるべく口を開く。

「俺は神崎陽。……つうか此処は何処なんだよ？それにさっき”丁度此処に来る頃だと思った”とか言っただけ……アンタは俺を待ってたのか？」

状況の飲み込めない不安のせいで、乾ききった俺の口から出るのは疑問ばかり。さっさと帰りたいという気持ちと、帰れるのかと言う思いが心に渦巻く。そんな俺の心情を悟ったのか、エルザは優しい口調で言葉を始めた。

「神崎陽、一応覚えておくわ。此処は”名の無い世界”……”名の無い世界”っていう世界なの。その辺は適当だから皆は”この世界”だのなんだのと呼んでいるわ。恐らくあなたの居た世界とは違う世界。あなたは元居た世界から此処へ呼び出された。この世界の何者かに”召喚”されたのよ。……貴方の世界の言葉で言つと、トリップって言うのが一番合っているかしら。」

「トリップ？……冗談じゃない。異世界だなんてそんな話あるはずがないだろ？」

驚きも隠さぬままに顔をしかめる。先ほどから次々と出てくる意味不明な単語のせいで、頭が吹っ飛んでしまいそうだ。俺はただのバスケ馬鹿の高校生、いきなりトリップなどといわれて信じられるはずがない。呆れた表情を浮かべ軽く肩を竦めると、俺は勢いよく立ち上がり大股でドアの方へ向かう。もちろん此処を出て家へ帰るためだ。

「お邪魔しました。自分で国へ帰るよ、飛行機が何かを手配して……。」

「好きになさい。どうせ貴方は此処から逃げられやしない。」

振り返り様に投げかけた俺の言葉をさえぎって、エルザの冷たい言葉が飛んできた。どこか哀れみを含んだエルザの瞳に、悪寒が背中を走る。一瞬ためらったものの、全てを振り払うようにしてドアを開き、乱暴にドアを閉めた。そして急ぎ足で元来た廊下を通り抜け、階段を下る。きっと俺をからかっているんだ。その手には乗らない。もやもやとした気分が抜けないままに、陽は玄関の扉に手をかけて外に出た。

少し力をかけて、重々しいドアを開く。暖かい光が差し込んできて太陽の眩しさに手をかざし空を仰いだ。その感覚は自分の居た場所のものと変わらないものだった。懐かしい雰囲気胸の中の不安がすーっと消えていくのがわかる。やはりここは自分のいる世界だ、あの緑輝く我ら地球だ。と、どこか改まった表現を思い浮かべると思わず笑みが広がった。とりあえずはこの薄暗い不気味な森を抜けようと、俺は止めていた足を動かし始めるのだった。

少しの好奇心と新たに芽生えた希望を胸に、森の中へ足を踏み入れようとした。が、その時突然空気が変わった。頭よりも早く察知した体は、一步踏み出した姿勢で動きを止める。少しでも体を動かせば張り詰めた冷たい流れに、飲み込まれてしまう気がした。息をしても、確実に殺される。何事かと視線だけをあたりに走らせると、深い緑の右前方の方に黄色い光が4つ、怪しく揺らめいている。鈍く光るそのものが、何かの目だというのもすぐ悟った。しかし動くことはできない。荒い息遣い、ざりざりとあたりに響く地面を引っ掻く音。こんな恐怖今まで感じたことが無い。体の細胞と言う細胞が、逃げると叫んでいるのに、脳は一向に命令を出さない。いや、出せていても体に伝わらない。

低い唸り声と共に地を蹴る音がした。もう駄目だ、俺は死ぬ。覚悟を決めて強く脛をとじる。俺は何処なのかもわからないこの地で、一人寂しく獣に八つ裂きにされ一生を終える。ああ、あの時エルザの話を真面目に聞いていれば、こうはならなかったのだろうか。あのまま安全な部屋の中に居れば。どうか神よ私を天国に……。

「……………あれ？」

間の抜けた声と同時に、ぎゅっと固く瞑った脛を恐る恐る開ける。開けた視界の前には何もいない。すでに獣が宙へ飛んで数秒、いやもつと経ったはずだ。一向に肉を引き裂く痛みはない、血が飛び散っている様子もない。足も地にちゃんとついている。生きている。ふいにズウンと何か落ちる音がして地面が揺れる、目の前に先ほどの獣が降ってきた。てつきり狼の群れにでも襲われたかと思っていたが違った。今前に横たわっているのは、狼は狼でも頭の2つある真つ黒な狼である。両の首に深い切り傷があり、無残にもそこから血が噴き出している。

一体何が起きたのかと唾然として死にかけた獣を見つめる。その亡骸を見つめながら助かったことを改めて感じ、体から力が抜けた俺はその場に座り込んでしまった。すると突然狼の横に何かが現れ、俺の視界を掠めた。

「だからいったでしょう。貴方は逃れられない……逃れられる運命など、存在しないの。」

静かな空間に、冷めた声が響き重々しい言葉が心に刺さる。顔を上げると、黒と白のドレスに金色の髪の少女がこちらを見下ろしていた、エルザだ。手には金の刃の短剣が握られ、剣だけでなく全身が返り血にまみれている。あの獣の血だ。顔の所々にも血が飛び、口の端についた血を舌で舐めとる様は、余りに現実とかけ離れている。先ほど獣を前にした恐怖とは別に、突拍子も無い恐ろしさを感じ俺は後ずさった。恐ろしいと言うよりは、不気味だった。エルザは涼しい顔で懐から白いハンカチを取り出して、剣についた血を拭いた。赤く染まったハンカチを投げ捨てもう一度俺を見据えてから、屋敷へと歩いていく。歩いた後を追うようにして赤い影が地面につく。手に握られていたはずの金色の短剣は、すでにエルザの手にはない。一度瞬きをしたらエルザの姿は消えていた。残された俺は、獣の死骸と水溜りのように広がる血を前に、ただぼんやりと途方に暮れるしかなかった。

さらさらと葉の擦れ合う音、何かわからない生き物の声。小鳥の囀り。混乱した頭に自然の音たちがゆっくりと安らぎを落とす。しばらくそうしてその場に座り込んだままだった俺も、ようやく腰をあげた。覚束ない足取りで、誘われるように屋敷へ向かう。あの獣を見てはつきりと認識した。此処は俺の住んでいた世界ではない、エルザの言うとおりだった。本当は最初からわかっているのかもしれない。

ない。でも肯定するのが恐ろしかった。しかもう、逃げることはやめた。今までどんな勝負でも逃げずに戦って来た俺が、尻尾を巻いて震え上がるなんて面目がたたない！！なんとしてでも元いた場所に帰らなければ。きつとエルザがその方法を知っている。

先程エルザが残っていた血の痕を辿るようにして屋敷の前まで来た。意を決して再び重い扉を開く。この短時間で何回行き来したのだろうか。さつきよりも力強い足取りで中に踏み込むと、階段を登り廊下を進む。そして突き当たりの部屋の前まで来て、ふと足が止まった。自然と脳裏に鮮血を浴びた少女の姿が浮かぶ。冷酷なまでの表情が鮮明に映し出された。あの時の恐怖を思い出したせいで、ドアに手が出せない。だがよく考えれば、エルザは俺を助けに来たのだ。それがどんな形であっても、命の恩人に変わりはない。大丈夫、きつと。自分の心に言い聞かせながら汗ばむ手でドアノブを掴み、ゆっくりと扉を開いた。

「お帰りなさい。遅かったわね。」

さつきと同じ定位に、エルザは座っていた。しかも身構えた俺の不安を裏切って、絵本を開いて読んでいるではないか。先ほど獣を一匹仕留めた少女だとは、到底思えるはずがない。拍子抜けして息を吐き、恐怖を感じていた俺自身にははっと笑った。思えば此処に来てから笑うのは初めてのことだ。

「ちょっと掃除にてこずってさ、君が散らかした”おもちゃ”の。」

なんだかこんな少女に恐怖していたのが情けなくて、意味ありげに口の端をあげて言っちゃった。そして俺もさつき座っていたベッドに腰を下ろす。エルザはその言葉に顔を上げるとふふ、と笑みを零した。笑った顔はやはり少女そのものだ。

「あら、あまり急だったからすつかり……。」

エルザはわざと知らないような口調で言ってから、悪戯な視線を向け続ける。

「どうせ貴方じゃ片付けきれないでしょうから、後で片付けなくてはね。」

そのからかうような言葉に俺は決まり悪く俯いた。どうやら俺が腰を抜かしていたことでさえ、エルザにはお見通しだったようだ。ゴホンと一つ咳をして、本題に入るべく真剣な表情へと戻る。

「で、なんだっけ。さっきの続き、聞かせてくれない？」

エルザが少し間を置いて、パタンと本を閉じた。上品にも両の手を膝の上で重ね、かしまった態度を見せる。いつの間にか俺を見つめる表情もいつもの無表情なものへと戻っていた。

「面倒だから全部一気に言わせて貰うわ。この世界は人間以外の生き物も高等知能を持っている。例えば魔法使いとか死神とか……。とにかくあなたの世界で夢物語だけの登場人物が、現実に存在する。これだけは頭に入れておいて頂戴。そして此処では500年余に一度、ある慣わしが行われる。」神の試練”と言われる慣わしがね。」

エルザはそこでいったん話を区切る。俺の頭はすでにパニック状態にあった。今ある話を整理するのに必死だ。

「神の試練”とは、最大6人1組で行われる戦いのこと。組は”マスター”と”ドール”により構成される。マスターは神により自

動的に選ばれる。それが子供であれなんであれ、運命からは逃れられない。ドールはというとマスターが自由に決め、契約の儀式を行うことでドールとなれる。ドールは5人まで付くことができるわ。戦いのルールは簡単、勝敗を決めるのはマスターの死。組のマスターが殺されたらドールが生き残っていてもその組は失格。勝つためならどんな手を使っても良し。これが最後の1組になるまで続けられるの。全ての組のマスターを倒し、生き残った組は神が褒美として全員の願いを叶えてくれる。ドールの願いにはある程度制限があるけど、マスターは世界が滅んでしまうような”禁忌の願い”を除きどんな願いでも聞き入れてもらえる。世界を巻き込んだ命がけのゲームというところね。」

「へえ……んなもんが存在するのかよここは。で、それと俺とが何の関係があるって?」

俺はつい顔をしかめ、小さな声で呟く。殺し合いで頂点を決めるゲーム、まるで何かの漫画のようだ。俺の言葉を聞き流し、エルザは話を続ける。

「”神の試練”の開催は、全ての住人に夢を通じて知らされる。そして1週間前、神から信託が下った。『次の満月までに100人の”印”を持つマスターが地に降り立つ。開催の日は次の満月が頂点に昇った時だ。』と。そして今日”印を持つマスター”がこの屋敷を訪れた……。」

そこで言葉を切るとエルザは伏せていた瞳をあげて、ひたと俺の瞳を捉えた。此処までの話の流れ、俺がこの世界に呼ばれた理由……合点がいった俺は興奮のあまり立ち上がり、はき捨てるようにエルザに言葉を浴びせる。

「……ちよ、ちよつと待てよ！ありえねえだろ！？だいたい俺は他所の人間だ。この世界のことは関係ねえ！」

エルザはいきり立つ俺をうっとおしそうに横目で見て、静かな視線で制した。こいつは自分が何を言っているのかわかっているのか？俺はまだ子供だし、やりたいことはたくさんある。死にたくなどない。エルザはまた穏やかな声で話し始めた。

「かつて伝説と呼ばれたマスターが居たわ。たった一人で全てのマスターを倒し、神の試練を制した男。彼の名はカイト、貴方と同じ世界の出身よ。それにどうやら毎回何人か、あちらの世界の住人が混じってしまうみたいなの。珍しい例ではあるけれど、あり得ない事ではないわ。」

俺はがつくりと膝を折ると、再びベッドに腰を下ろした。例えエルザの言うことが正論でも理解できない。第一いきなり訳のわからない世界に来て、ゲームに巻き込まれ死ぬかもしれないなど受け入れたくも無い。

「……嘘だろ、おい。だいたい俺の体に印なんてないし？」

それでも何とか抜け目を見つけようと、ひきつった笑みを顔にはりつけて自分の体を見回しながら問いかけた。そう、見る限りは俺の体の何処にも印など見当たらないのだ。

「あら、まだ自分の顔を見ていないの？」

エルザは溜め息を一つついて何処からとも無く、手鏡を取り出して俺の方へ向けた。俺は疑問符を浮かべ訳もわからずに鏡へ視線を移した。

「なんだってんだ……っ!？」

鏡の中の自分の顔を見て愕然とした。なんと額にかかる髪の毛の隙間から、”D”の文字の筆記体に変化したような紋様が黒い色で刻まれている。今まで鏡など見なかったから、気付かなかったのだ。口をぱくぱくと動かし間抜けにも鏡に見入る俺を置いて、エルザは落ち着き払った様子で、鏡をしまい再び口を開いた。

「それはマスターである証。でも貴方は運がいいわ。ドールを仲間に入れる前に、殺されてしまうマスターは多いのよ。ほかの世界の人間の中には、訳もわからないまま巻き込まれて気が触れる者もいると聞くもの。それに比べれば良いほうね。生きる望みは十分にある。」

エルザの言葉が空っぽの頭に入っては抜けていく。今の俺の頭には言葉として入ってこない。いきなり戦いだのゲームだの言われて、しかも死ぬかもしれない?そんなの無いだろ……俺の人生どうなってんだ……。

「……良くも悪くも貴方は選ばれた人間なのよ、陽。いいえ……M aster?」

儂く消えてしまいそうな声で告げたエルザの表情は、少し悲しげで切ないものだった。

「はは……嫌な響きだぜ」

思わず声が震える。確かに物語の主人公になりたいと思ったこともあるが、こんな形で叶うとは思ってもみなかった。額に手をやり先

ほど見た痕をなぞるように、髪を払った。

「でも貴方が元の世界に戻ることと、戦うことは必ずしもかけ離れてはいない。戦いに勝ち、陽が願えばいいの。さっきも言った通りマスターならばいくつかの禁忌を除き、願いに上限はないの。それを利用して元の世界に帰れるわ。逆に言えばそれを除いて帰る方法はない」

帰れる方法はない……その言葉を聞いてしばらく考えをめぐらせた。俯いて目を瞑りじつと黙り込んだままだ。やがて溜め息をひとつつき、茶色の髪をくしゃつと手でつかみながらエルザを見つめる。エルザもしっかりと視線を捉え返してきた。

「……もし此処で俺が、神の試練なんか知らん。マスターになんかならねえっていったらどうなんの？」

俺の問いかけにゆっくりと首を横にふるエルザ。

「言ったところで状況は変わらないわ。最終的にはいくら逃げようと、貴方を倒すために誰かしらが追っ手が来る。そうすれば貴方は殺されるのを待つか、戦うかしか術はない」

「だと思った」

予想通りのエルザの答えを聞いて俺は、ククツと喉の奥で笑った。そして口元に笑みを浮かべて挑戦的な口調で言っちゃった。

「俺はなんとしても元の世界に帰る、その前に死ぬなんてごめんだぜ。」

怪物だろーがなんだろーがかかってこいつてんだ」

力強い口調で言うとニツと笑って見せた。エルザは予想に反した俺の答えに、少々驚いたように目を開いた。

そして、一瞬微かに笑みを見せた。が、やはりその表情はすぐに戻ってしまふ。笑った表情だけはその年頃の少女そのものだというのに……。

「てつきり怯えて逃げ出すと思っていたのに……いいわ。ひとつだけ、条件をつけさせてもらうわよ。私を含め4人をドールとして傍に置くこと。嫌なら別にいいけどね。」

エルザは妖しく口の端を上げながら問いかけた。これも話の展開から予想はできた。それに、誰もいないよりはエルザがいてくれた方が助かる。俺は2つ返事で首を縦に振って笑いかけた。その返事を聞くとエルザは満足気な表情で立ち上がる。

「ありがとうございます、マスター。必ずや幾多の苦難からお守りし、主の願い叶えることを、此処に誓います」

ドレスの裾を手で持ち頭を下げる格好を取ったエルザが優しい声色で告げる。先ほどまでの偉そうな態度が嘘のようで、俺は少々戸惑ってあわあわと両手を顔の前で振った。

「そ、そんな改まんなくたっていいって……気味が悪いしさ」

「……形だけはとらないと、ね」

言われるがままに頭をあげたエルザはすっかり元の口調に戻ってしまっていた。相変わらずの生意気な声色で言うと、くるっと背を向けてドアのほうへ歩いていく。……これならさっきのままの方が良

かった気がする。

「今日はもう遅いわ。この部屋使って良いから、ゆっくり寝なさい。紹介しなきゃならない者もいるし。必要なことはまた明日話すことにするわ」

それだけ言い残すとエルザはドアへ手をかけた。そういえばいつの間にか日は沈み、外は薄暗くなっている。出ようとするエルザの後ろ姿を見て、ふと俺は疑問の一つを思い出した。これを聞かずに安心して寝ることなど到底無理だ。陽は立ち上がってエルザを呼び止める。

「待ってエルザ……最初あったとき、なんで俺が此処にくるってわかったんだ？」

エルザは動きを止めて振り返り、呆れたような視線を向けてきた。

……あれ？そんな変なこと聞いたっけ……？

「言ったでしょ、この世界の人は半分以上普通じゃないの。私がそういう能力を持ってたってだけ」

「あ……そっか。でもエルザって何の種族なんだよ？」

次いで質問を浴びせたらエルザは溜め息ひとつついて、面倒だとも言わんばかりに肩を竦める。

「質問はそれまでよ、おやすみ陽。せいぜい”血を吸われないように”気をつけなさい」

エルザは強制的に言葉を切ると、茶目つけたつぷりにウィンクして、

出て行ってしまった。残された部屋に固まったままの俺だけが残される。なんとも言えぬ脱力感にベッドへと体を沈めた。

「……………吸血鬼と同居かよ」

その言葉を最後に、俺は眠りについた。この日を境に、俺はこの不思議な屋敷の住人となった。そして、陰惨な戦いの世界へと足を踏み入れることになる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4161j/>

---

Dolcest ~ Edenの物語 ~

2011年10月6日15時02分発行